

右脚みぎあしのふくらはぎに違和感いわけんを覚えたのは、急な坂道を登り始めた直後のことだった。

そのあたりが突っ張るような、筋肉が固く強張こわばっていくような感覚だった。草太は驚いてブレーキをかけ、坂の途中で地面に足をついてしまった。

「……?」

自分の脚を見やり、何度か回したり軽く叩たたいたりしてみる。やがてふくらはぎの違和感いわけんは消えていったが、代わりに頭の中に不安感が根を下ろしてしまった。

こんなに長い距離を走るのは初めてなのだ。さんざん走ったり海に入ったりして負担をかけたせいで、脚がどうにかなってしまったのかもしれない。こんな脚で本当に帰り着けるのか、急に心配になってきた。

なにしろ風ヶ丘おかまでの道のりはまだ半分以上残っている。登り坂はまだまだ続くし、疲れも増してきている。さつきから、少し頭まで痛くなってきた。

草太がそんなことを考えている間にも、昇平はどんどん先に進んでいた。蛇行しながら坂道を登っていき、もう坂のチョウジョウにまで達しようとしている。

対向車線でハンドルを切った時、昇平がこっちを向いた。草太が止まっているのに気づき、道の真ん中でブレーキをかけている。

「ソータ、どうした?」

大声で尋ねてくる昇平の息も乱れていた。こっちに向かつて身を乗り出し、今にも坂を下ってきそうな格好になっている。

こむら返りとか、足がつるとかいう言葉は知っていた。しかし自分の身に起きるのは初めての経験で、草太は頭の中がパニックになってしまった。

これ以上ペダルを踏んではいけないような気がした。

慌ててブレーキをかけ、道の脇で止まろうとしたので、バランスを失って自転車ごと倒れてしまった。

「ソータ!」

後ろから、昇平の悲鳴のような声が聞こえた。

気がついたら、涙が出ていた。

転んだ時にできたのはかすり傷程度だったし、自転車が壊れたわけでもない。昇平に教わって足の親指を引っ張っているうちに脚の痙攣けいれんも収まったが、涙だけはどうしても止まらなかった。

悔しかった。鈍い痛みが残る右脚が、立ち上がろうとしても力の入らない全身が、ただ悔しくて仕方なかった。昇平はまだ走れるのに、海に行こうと言いつつ自分が走れないのが情けなかった。

「大丈夫だって、泣くなよ。ちょっと休憩してから出発すれば、またちゃんと走れるようになるからさ」

昇平が慰めてくれたが、余計に涙が出てきただけだった。これを飲めば元気が出ると差し出されたスポーツドリンクの水筒も、首を振って断った。

- 《 A 》
《 B 》
《 C 》
《 D 》

草太は慌てて首を振った。せっかく登った昇平に、また坂を下らせては悪いと思ったのだ。昇平も疲れているのだから、自分も負けてはいられない。

昇平の質問に答える代わりに、草太は再びペダルをこぎ始めた。残った力を振り絞り、なんとか昇平に追いつこうと走っていった。

「ソータ、本当に大丈夫か?」

「ちょっと脚が疲れただけだってば。全然平気だよ」

再び二人で走り出してから昇平が後ろを走った。

またさつきみたく二人の差が開いたりしないように、疲れている草太が先に行くことになったのである。

つまり後ろから昇平に見守られる格好なわけで、草太としてはフクザツな気分だった。その方が安心なのはタシかだけれど、昇平のお荷物になっているようで悔しかったのである。

その坂を越えた後は疲れなど感じさせないように頑張った。下り坂から平地にかけてはスピードを上げ、わざと重たいギアを踏んで走っていった。

しかし草太の頑張りも長くは続かなかった。やがて脚の疲労がゲンカに達してしまったのだ。

長く平地が続いた後、前の方に登り坂が見えてきたところだった。きつそうな坂の勾配に思わずため息をついた時、草太の脚にイヘンが起きた。

ふくらはぎに、突然鋭い痛みが走った。筋肉がぎゅっと硬直し、右脚が自分のものじゃなくなったように感じた。

その感覚に驚いているうちに、脚の筋肉がびくびくと痙攣し始めた。それと共に痛みも増し、目の前が一瞬真っ白になる。

そんな草太を、昇平はただ困ったように見つめている。一瞬目が合い、草太は涙を拭いながら顔を伏せた。

「……もう、走れないよ」

小さく呟いた。口に出してそう言った途端、また涙が溢れてきた。

「走れないって……」

昇平が言った。途方にくれたような声だった。

そのまましばらく、二人とも黙っていた。草太は何も言う気になれなかったし、昇平は何と言っているか分からないようだった。

やがて、昇平が毅然とした声で口を開いた。

「泣くな!」

草太を怒鳴り飛ばすような声だった。草太が驚いて顔を上げると、急に優しい声になって告げてくる。

「もう走れないんだったら、俺んちに電話して迎えに来てもらおうぜ。うちの父さん、今日は家でごろごろしてるはずだからさ。——な?」

「……………」

最後の問い掛けに、草太は少し考えてから頷いた。

もう自転車をこぐ力は残ってなかったし、自分で走れないなら大人に迎えに来てもらうより仕方ないのだ。

「じゃあ俺、近くの電話ボックス探してかけてくるからさ。——ソータは、絶対ここから動くなよ」

そう言い残し、昇平が自転車にまたがって走っていく。——その後ろ姿が涙に滲みかけたが、草太はなんとか泣くのをこらえて歯を食いしばった。

電話をしたのは昇平の家だったはずなのに、迎えに来たのは草太の母だった。二人の自転車を積んで帰るため、草太の家の軽トラックでやってきたのだ。

「昇平くん、本当にごめんね。——草太、大丈夫なの？」
母が運転席の窓を開けて尋ねてくる。草太は黙って頷き、下唇を噛んでそっぽを向いた。

それに、草太はもう泣き止んでいた。そして母の前では、絶対に涙を見せたくなかったのである。

草太と昇平の自転車は軽トラックの荷台に積み込まれた。助手席には一人しか乗れなかったため、草太が昇平のどちらかが荷台の上に乗らなければならぬ。

「荷台には草太が乗りなさい。草太のせいで車で帰ることになったんだから」

母が草太に言ってきたし、草太もそれに頷いた。母と二人になってあれこれ言われるより、一人で荷台に乗った方が気が楽だと思ったのだ。

しかしその時、昇平が声を上げた。

「おぼちゃん、俺が荷台に乗るよ！」

「いいのよ。昇平くんは助手席でゆっくり座って休んでって」

「休むんならソータだよ。俺より疲れてるんだから」

「ほら草太、あんたが心配かけるから昇平くんが気をつかっちゃうんじゃない」

母は草太を軽く睨んできた。しかし昇平は、笑って首を横に振った。

「違うよおぼちゃん。俺、前からいっぺんトラックの荷台に乗ってみたかったんだ」

「えっ？」

「大丈夫よ、別に怪我したわけじゃないの」

奏も交通事故などではなかったと知ってほっとしたようだった。しかし草太の心の中は、情けなくて恥ずかしい思いでいっぱいだった。

昨日は奏に好きだと告白したのに、そして今朝は奏に応援されて出発したのに、自分は途中で力尽きてしまった。自転車もこげず、母の運転する車に乗って帰ってきたのだ。——できることなら、こんな無様な姿を奏の前にさらしたくなかった。

草太と目が合うと、奏はにっこりと笑いかけてきた。しかし草太にとっては、消え入りたような気持ちが増すばかりだった。

「……」

何か言おうとしたが、言葉は何も出てこなかった。

奏から目を逸らし、黙ってうつむくことしかできない。

すると次の瞬間、横から伸びてきた腕に肩を掴まれた。昇平が草太を引き寄せ、明るい声を上げたのだ。

「俺達、ちゃんと自転車で海まで辿り着いたんだぜ」

草太と肩を組み、奏に向かって得意げに告げる。その声は、今日の冒険を自慢しているようにさえ響いた。

「二人だけで海まで着いたんだけど、帰りは疲れちゃったから、俺が電話して迎えに来てもらったんだ」

草太をかばうような言い方だった。草太が泣き出したことには一言も触れず、まるで二人してばててしまったように喋っている。

「とにかく海までは行ったんだし、帰りは車の方が楽だもん」

おどけた言い方に、周りの大人や奏も笑った。草太もそれでいくらか楽になり、なんとか奏に向かって笑顔が浮かべることができた。

(竹内真「自転車少年記」より)

「荷台で風に吹かれるのって、気持ちよさそうじゃん。前にテレビで見て、俺も乗りたいって思ったんだ」

「……………」

母と草太は顔を見合わせた。どうやら昇平が本気で言っているようだったのだ。結局助手席には草太が乗ることになったのだった。

昇平は喜んで荷台に乗り込んだ。車が走り出してからは、寝ころんだり身を乗り出したり助手席の草太に手を振ったりしてはしゃいでいる。

バックミラー越しに昇平と目が合った時、草太もようやく自然に笑うことができた。

軽トラックが草太の家に着いた時、玄関からは祖母と昇平の両親が出てきた。——それだけではない。隣の家からは、奏が姿を現したのだった。

「ソータ君、大丈夫？」

奏の顔にはいやに真剣な表情が浮かんでいた。話が変な風に伝わったらしく、草太が怪我でもしたらしいと思っ込んでいたのだ。

昇平が自分の家に電話をかけ、そこから草太の家に話が伝わって軽トラックが迎えに出た。——そして留守番に残った草太の祖母は、奏の母親に向かって草太が自転車で乗れなくなったので迎えに行ったのだと説明してしまったのである。

祖母は詳しい事情を知らなかったし、やがて草太の家には昇平の両親までやってきた。隣の家の奏には、なんだか大騒ぎになっているように見えたのだろう。

草太が事故にでも遭ったんじゃないかと心配していた奏に、草太の母は笑って首を振った。

問い一 ———線部⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺について、漢字の部分はひらがなに、カタカナの部分は漢字に直しなさい。

問い二 ———線部①「代わりに頭の中に不安感が根を下ろしてしまっただ。」とありますが、それはどのようなことですか。文章中から「〜ということ。」につながる形で十五字で探し、最初の五字を答えなさい。

問い三 ———線部②「疲れなど感じさせないように頑張った。」理由として適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 昇平も疲れているのだから、自分も負けてはられないと思ったから。
- イ 昇平が心配して何度も質問してくると、返事をするのが面倒だから。
- ウ 昇平に後ろから見られているので、弱みを見せたくなかったから。
- エ ゆっくり走ったのでは、昇平のお荷物になるようで悔しかったから。

問い四

——線部③「涙が出ていた。」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 転んだときにできたのはかすり傷程度だったが、大切な自転車には傷がついてしまったから。

イ 自転車が悪く壊れてしまったわけではなかったが、足の痛みが我慢できなかつたから。

ウ 昇平はまだ走れるのに、誘った自分が動けなくなっていることが情けなかつたから。

エ 立ち上がろうとしても力が入らないのに、昇平に大丈夫だと言われて悔しかつたから。

問い五

《A》《E》には——線部④「そんな草太」の様子を表した文が入ります。次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

イ。

ア 口の横から麦茶がこぼれ、Tシャツの胸を濡らした。

イ 腕でいくら拭つても、草太の顔はぐしゃぐしゃになつたままだつた。

ウ しゃくりあげながら、自分のリュックを開いた。

エ 顔も涙と鼻水で濡れていたし、汗もしたたり落ちてくる。

オ 残り少なくなつた麦茶の水筒に直接口をつけ、中身を一気に喉に流し込む。

問い六

——線部⑤「口に出してそう言った途端、また涙が溢れてきた。」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 言葉にしたことで、あきらめてしまった実感がこみ上げてきたから。

イ 言つてしまったことで、昇平を心配させたことを後悔したから。

ウ 草太の言葉によって、頼りにしていた昇平まで途方にくれてしまったから。

エ 自分で決めたことなのに、はっきり言えなかつたことが情けなかつたから。

問い七

文章中には次の一続きの二文が抜けています。どこに入ればよいですか。直前の五字を答えなさい。

・母の顔を見た時は、正直ほつとした気持ちがかみ上げてきた。だけど母から昇平に謝られてしまったせいで、どんな顔をしていいか分からなくなつた。

問い八

——線部⑥「草太もようやく自然に笑うことができた。」とありますが、それはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問い九

——線部⑦「姿が姿を現した」とありますが、草太にとって姿が姿を現すと具合が悪い理由をわかりやすく説明しなさい。

問い十

——線部⑧「話が変な風に伝わった」とありますが、どのように伝わったのか説明している部分を文章中から探し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問い十一

——線部⑨「草太もそれでいくらか楽になり、なんとか奏に向かつて笑顔が浮かぶことができた。」とありますが、他人の気遣いに救われたあなたの経験を書きなさい。ただし、できごと、他人の気遣いを具体的に紹介し、なぜそれで救われたのかという理由の説明を必ず含めること。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 生物多様性が高いというのは、たんに種類が多いという意味ではない。①もちろん種類が多い方が生物多様性は高いのだが、それだけではないのだ。

2 たとえば、A島にもB島にも、ヒトと木という二種の生物が、併せて一〇〇個体いたしよう。A島にはヒトが五〇人いて、木が五〇本生えていた。一方B島では、ヒトが九九人いて、木は一本しか生えていなかった。この場合はB島よりもA島の方が、生物多様性が高いと考える。B島の生態系よりA島の生態系の方が、安定性が高いのは明らかだろう。なにしろB島では、木が一本枯れただけで、種が一つ消えてしまうのだから。このように生物多様性においては、種類の多さだけではなく、「均等度」も重要である。

3 さてB島では、均等度が低いために、生物多様性が低かった。この均等度が低いというのは「※」ともいえるけれど、逆に「ヒトが九九人もいるから」ともいえる。つまり、一種が爆発的に増加するの、やはり生物多様性を低くするのだ。現在の地球でもっともシンコクな問題は、ヒトが爆発的に増加していることなのである。②このため地球という生態系は、著しく不安定になっている。

4 ヒトは、生物多様性の高い森林を、生物多様性の低い農地などに変えてきた。また、生物が何十億年もかけて化石燃料の形に変化させた二酸化炭素を、再び大気中へとカイホウしてきた。このように、ヒトは環境を操作する能力が非常に高い。そのうえ人口が爆発的に増えているので、地球の多くの場所が、ヒトにとって都合がよいように変化させられてきた。

接的な生態系サービスの例である。また、きれいな水や空気も、私たちが生きていくために必要なものなので、生態系サービスである。さらに、芸術家がきれいな景色を見て絵を描いたり、子どもが自然と触れあうことによつて健やかに成長したりするのも生態系サービスに含まれる。

10 一方、ヒトの役に立たなくても、生物多様性は守らなくてはならないという考えもある。時代によつて、ヒトが受ける生態系サービスは変化する。だから、これから先、どんな生態系サービスが重要になるかわからない。そのため、現在生態系サービスを生み出している生物多様性だけでなく、今は何の役にも立っていない生物多様性も守らなければならぬという考えである。もっとも、これも究極的には、ヒトにとつて役に立つから、という考えだけだ。

11 さらに、ヒトとは無関係に、地球の生物システムそのものが重要だから、という考えもある。これはリッパな考えで、まったくその通りだといいたくなる。いいなくなるけれど、やはり地球の生物全てを対等に扱うことは難しい。私たちが病気になるたびに、病原体である細菌の命の尊さを考えたら、病院になんて行けない。もしも抗生物質を薬としてもらったなら、そしてそれを飲んだら、細菌が死んでしまう。そんなかわいそうなことはできない。でも、なかなか、そういうわけにもいかないし。

12 それは極端にしても、たとえば、日本にはオオカミがいた。北海道にはエゾオオカミが本州と四国と九州にはニホンオオカミが息していた。ともに明治時代には絶滅したが、その後シカやイノシシが増えて、農作物などの被害が問題になっている。C、日本の生態系を昔のように回復させるために、海外からオオカミを連れてきて日本

5 そのため、さまざまな生物が次々に絶滅しているのが現状である。生物多様性はどんどん減少しているのだ。A、リヨコウバトは、かつては北アメリカでもっとも個体数の多い鳥だった。五〇億羽ぐらい生息していた、というスイテイもある。ところがヨーロッパからの移民による開拓のために、リヨコウバトのすみかである森林が減少した。そのうえ肉を食べるために乱獲された。その結果、一九世紀の百年間を通じてリヨコウバトは激減し、ついには一九一四年に絶滅してしまつた。

6 もっとも、このような生物多様性を減少させる活動は、最近に限つたことではない。たとえば、現在のギリシャには「白亜の崖、そして青い空と海」といった美しいイメージがある。しかし、古代文明が栄える前のギリシャは、森林の多い肥沃な土地だった。古代ギリシャ人はこの豊かな土地でまれに見る大規模な自然破壊を行い、森林を消滅させて山をハゲ山にしてしまつた。そして、ギリシャを緑のイメージから白のイメージに変えてしまつたのである。生物多様性がいかに激減したかは想像に難くない。

7 それでは、なぜ生物多様性を守らなくてはならないのだろうか。この問いに答えることは、実はそう簡単ではない。

8 まず、最初に思いつく答えは、ヒトにとつて役に立つから、というものだろう。ヒトが生態系から受ける利益を「生態系サービス」というが、その生態系サービスの源泉は生物多様性である。B 私たちは、生物多様性のおかげで、生態系サービスを受けることができるのだ。

9 生態系サービスにはいろいろなものがある。生態系は、食べるための魚や家を夕てるための木材を、私たちに与えてくれる。これは自由に放すことが、一部で計画されている。しかし、野生のオオカミがいたら、ヒトが襲われる危険性は非常に高い。それでもオオカミを日本に復活させるべきだろうか。

13 これらの問題には、唯一の正解はないのかもしれない。もしもヒトのことだけを考へて、自然をどんどん破壊していったら、そのうちヒトは地球上で生きていけなくなるだろう。しかし、自然のことだけを考へて、ヒトのことをまったく考へなかつたら、病院にも行けないし、オオカミにも食べられてしまふし、それはそれで生きていけないかもしれない。それらの両極端のあいだで、ヒトはいろいろな意見を持つのだろう。

14 こういうふうには、いろいろな意見を持つこと自体も、生物多様性だ。すべてのヒトが同じ意見を持つのは、なことなのだ。それはヒトを含む生態系をあらゆるくさせるから。

(更科功「美しい生物学講義」より)

問一 線部①～③について、漢字の部分はひらがなに、カタカナの部分は漢字に直しなさい。

問二 A C に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。
ア そこで イ たとえば
ウ ところが エ つまり

問三 この文章は大きく二つのまとまりに分けられます。後半の最初の段落番号を答えなさい。

問四 線部①「もちろん種類が多い方が生物多様性は高いのだが、それだけではない」とありますが、生物多様性が高いという意味には他にどのようなことが挙げられますか。

次の答え*の空欄A・Bにあてはまる語として最も適当なものをA・B群からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

* A が B こと。
A群 ア 安定性 イ 均等度 ウ 危険性
B群 ア 高い イ 低い ウ 同じ

問五 空欄※ に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 木が一本枯れているから。
イ 木が一本しかないから。
ウ 木が五〇本生えているから。
エ 木が九九本もあるから。

問六 線部②「不安定」と同じように、熟語の上に否定する語を付ける際、次の熟語の上につく一語をそれぞれ答えなさい。

ア 完成 イ 責任 ウ 可能 エ 常識

問七 線部③「さまざまな生物が次々に絶滅している」理由をわかりやすく説明しなさい。

問八 線部④「ギリシャを緑のイメージから白のイメージに変えてしまった」とありますが、緑のイメージと白のイメージとはここでは何を指していますか。それぞれ文章中から抜き出し、三字以内で答えなさい。

問九 線部⑤「想像に難くない」とありますが、ここでの意味として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 想像を超えてしまう イ 想像するのがつらい
ウ 想像するのは楽しい エ 想像するのはたやすい

問十 「生物多様性」についてのア～オの説明の中から、本文の内容と合っているものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア ヒトにとって都合がよいように、地球の多くの場所が変化させられることにより、生物多様性は高くなった。
イ 現在のギリシャに「白亜の崖、そして青い空と海」という美しいイメージがあるのは生物多様性が高かったからである。
ウ 時代により生態系サービスは変化するため、今ヒトの役に立たない生物多様性も守るべきだという考えもある。
エ ヒトがいろいろな意見を持つこと自体が、生物多様性を壊す原因となっている。
オ 生物の一種が爆発的に増加することは、生物多様性を低くすることにつながる。

問十一 線部⑥「生態系サービスにはいろいろなものがある。」とありますが、次の各問いに答えなさい。
(1) どのようなものを生態系サービスというのですか。文章中から十三字で抜き出し、初めの五字を答えなさい。
(2) 生態系サービスとして受けとる例として、あてはまるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア きれいな水や空気 イ 地球温暖化の推進
ウ 頑丈な鉄筋の家 エ 自然食品の提供

問十二 に入る言葉として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 不思議 イ 平和 ウ 危険 エ 当然

